Meisei University

『狭衣物語』の一品宮

――降嫁した内親王の問題として（二）――

高橋由記*

はじめに

『狭衣物語』では、主人公狭衣に対して内親王の降嫁が複数回話題にされる。嵯峨帝女二宮（入道宮）・嵯峨帝女三宮（斎宮）・嵯峨院女一宮（後一条帝中宮）・一条院女一宮の四人の内親王である。嵯峨帝三皇女の降嫁は話題にされては消えていき、結局、一条院女一宮（以下、一品宮）が降嫁したが、[1] 狭衣は「妻の宿世さへ尽きにけるかな[2]（巻三・②136）」と、この降嫁を嘆いた。一方、一品宮も狭衣を「見ま憂くつらき人（②114）」と感じていた。終始お互いの存在を肯定的に捉えることはなく、この降嫁は不幸なままであった。

史実において、臣下への皇女降嫁があまり例のないことは今井源衛氏の調査[3]によって明らかである。結婚しないことを前提とする内親王を室に持つことは男性貴族にとって栄誉であり、貴族社会における優位性を保証することとなる。『狭衣物語』において、再三にわたって狭衣に内親王降嫁の話が持ち上がったのも、そうした認識と切り離すことが出来ない。また、後藤祥子氏は、皇女の降嫁には「父帝の強力な意志のもとで、きわめて政策的に取り運ばれる、花婿にとって栄光の降嫁」と「父帝の意向とほとんど無関係に、皇女の人物本位で秘かに行なわれる結婚」とがあり、『源氏物語』において「柏木にとっての理想が前者であったとするなら、夕霧と落葉宮の結びつきは（中略）まさに後者の典型」とされた。[4] 帝や院の裁可の有無をはっきりと区別することは、物語における皇女降嫁を考察する上で非常に重要だが、史実でも、天皇や院による裁可のあった降嫁と、臣下側からの積極的な働きかけで実質的な結婚が成立したものとは、分けて考えられていた。『小右記』長和四年（一〇一五）十一月十五日条に「辛酉（中略）左大将可被合女二宮（禔子内親王）之事、更不可知、雖有仰事、不申左右、大将妻母尼（具平親王室）聞之、水漿不受、流涙悲泣云々、□〔脱アラン〕者主上思立事也、所被仰之例、故北宮（康子内親王）例云々、奇也、怪也、邑上先帝不知食之事也、李部（敦明親王）可立給太子之御計云々、太不便也[5]」とあるのは、村上天皇の皇女康子内親王が藤原師輔室となったのは、村上天皇没後のことであり、天皇の知るところではなかった、つまり裁可のあるものではなかったことを記したもので、皇女の降嫁に際して、裁可の有無を明確に区別する意識があったことを示している。

『狭衣物語』における一品宮降嫁は、一応、兄帝・母女院の許可のもと、とりおこなわれている。従来の考え方からいえば、狭衣にとってこれ以上にないほど名誉なものであったはずだが、この結婚は結局、不幸なままであった。他の物語とは異なる『狭衣物語』の皇女降嫁の有様と

NII-Electronic Library Service

Meisei University

内実について、以下に考察したい。

一　嵯峨帝三皇女

内親王の降嫁は少ないが、なかでも父帝（父院）存命中の降嫁はあまり例がない。[6]『源氏物語』宿木巻で今上帝女二宮の薫への降嫁が話題にされたとき、

帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく、盛りの御世に、ただ人のやうに婿とり急がせたまへるたぐひは少なくやありけん。右大臣（＝夕霧）も、「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院（＝源氏）だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮（＝女三宮）を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」とのたまひ出づれば、宮（＝落葉宮）は、げにと思すに、恥づかしくて御答へもえしたまはず。（宿木・⑤475）[7]

と、父帝在位中の降嫁が異例であることが記されている。ところが、嵯峨帝女二宮の狭衣への降嫁は、父帝在位中・母后存命中に複数回話題にされた。最初に降嫁の話が出たのは巻一で、天稚御子の降臨によって天駈けりそうになった狭衣を、地上に留めるためであった。当時、狭衣は二位とはいえ、まだ中将に過ぎず、まして女二宮は后宮所生の内親王だったから、破格の待遇であった。[8]狭衣は降嫁を望んでいたわけではないが、皇女降嫁は名誉なことであり、拒む理由もない。しかし「大宮のめざましきことにむつかりたまひけるものを（巻一・①68）」と、狭衣は女二宮の母大宮が降嫁に反対であることを理由にして、話を進めようとはしなかった。のちに大宮自身が「宮たちは、ただなにとなくて過したまふこそ世の常なれ、行く末のためと、なほなほしく定まりたまふとも、さしも思ひ寄らぬ隈なかなるほどには至らぬ隈なき心ばへをや見たまはんずらんと、めざましう心憂かるべければ、ただ見たてまつらんとこそ思ひつれ（巻二・①178）」と述べており、降嫁に消極的であったことが判る。大宮の皇女独身論は新編全集頭注が指摘するように、『源氏物語』の落葉宮の母一条御息所を髣髴とさせる。まして女二宮は、落葉宮のような更衣腹ではなく、后宮所生内親王であった。降嫁と善しとしないのも当然であろう。

ところが、嵯峨帝女二宮の降嫁に対して、「面目のかたもおろかならず（①163）」と、狭衣の名誉を喜んでいた堀川大臣は、降嫁に乗り気でない狭衣の様子を見ると

さらで、后腹におはすとも、あるまじかるべきことにもあらず、その御世より、帝の御むすめは得たまへるにもあらず。ありがたくめでたきさいはひ面目と思ふべきならず。いにしへより近き例にも、そこより見たて少なき納言たち、さる例みないとおほかり。まいて、そこの御ためにはかしこしともおぼえず。（巻二・①164）

と、后宮所生の内親王であっても降嫁に支障のないことや、降嫁は前例のあることだからそれほどの幸運と思う必要もないこと、さらに当時大納言である狭衣よりも身分の低い人物への降嫁も多いことを述べる。堀川大臣は、のちに一品宮降嫁に際しても、

など、さまで便なかるべきことかは。今も昔も、さのみこそは、そこに劣りたる人だに例多かることぞかし。まいて、さらによも便なしと思しめさじ。かくのみ、寄辺なくて過ぐしたまふが、いと見苦しきに、まことに、さやうにも物したまはば、内にも院にも、奏してん。あるまじきことと思しめすとも、我がさ申さむことを、さら

NII-Electronic Library Service

Meisei University

に否びさせたまはじ（巻三・②85）

と、内親王に比した狭衣の優位性を語っている。内親王降嫁さえも「そこ（＝狭衣）の御ためにはかしこしともおぼえず（①164）」と言い切る大臣のことばは、先に挙げた『源氏物語』にみる歴史認識とは明らかに異なっている。狭衣は内親王をも凌ぐ優れた存在なのである。

巻二になると「母宮の御方ざまとても、もの頼もしき人もものしたまはす（①161）」、「その宮、母方に御後見すべき人なくて、行く末のこと思しめすにこそあらめ（①165）」と、女二宮には母方に有力な後見人がいないことが明かされる。皇女の後見は、母方の縁者（外祖父・外伯叔父など）が担うのが普通で、あるいは皇女の兄弟が後見することもあろう。[9] しかし嵯峨帝皇女たちの後見となるべき母方の人物は物語に一切登場していない。そもそも中納言の娘と思われる大宮[10]が立后できたことが不思議であり、[11] 仮に大宮に兄弟がいたとしても、皇女の後見足りうる高位高官とは思われない。また、表向きには嵯峨帝皇女と同腹の皇子にあたる若宮（実際には、狭衣と女二宮との子）は、自身が後見を必要とする幼さである。異腹の兄弟である東宮の庇護も望めないであろう。[12] 嵯峨帝皇女たちの後見はもともと弱かったが、母大宮の死や、父帝の退位・出家後は、堀川大臣や狭衣がその役目を全面的に担っていた。堀川大臣や狭衣が嵯峨帝皇女たちを積極的に庇護する義務はないから、嵯峨帝としては、降嫁させる形で皇女の後見を託す必要があった。次々と話題にされる嵯峨帝皇女の狭衣への降嫁は、結婚という形による安定した後見・庇護を望む皇女側（嵯峨帝側）の思惑が深く関わっている。

結局、女二宮の降嫁は、女二宮の出家によって破談となった。しかし、嵯峨帝皇女の降嫁の話は立ち消えることはなく、つづいて嵯峨帝女三宮の降嫁の話が持ち上がる。父院の出家に先立って、後見の弱い皇女の降嫁を進めようとしたことは、新編全集頭注が指摘するように『源氏物語』若菜上を意識した形になっているが、まもなく女三宮は斎宮に卜定されて降嫁の話は立ち消えとなった。しかしそれでも嵯峨帝皇女の降嫁の話はなくならず、巻三冒頭では、母大宮の死によって斎院を退下した女一宮が若宮とともに一条宮に住み、嵯峨院は若宮と女一宮の後見を狭衣や堀川大臣に期待した。若宮の後見はともかく、内親王の後見は結婚を意味する。つまり、嵯峨院は女一宮の狭衣への降嫁をほのめかしたのである。とはいえ女一宮降嫁も具体的な話にまで至らなかった。ほぼ同時期に、自分の娘である飛鳥井姫君が一品宮のもとにいるのを知った狭衣が、一品宮の住む一条院周辺を徘徊し、それが一品宮の降嫁へと繋がるからである。以上、次々と話題に上った嵯峨帝三皇女の狭衣への降嫁は、さまざまな理由により回避された。

二　一条院一品宮

一品宮は一条院と女院の間の女一宮で、巻三において一品に叙された。「御代りには、女院、姫宮などを、常に見たてまつらん（②75）」と、父である故一条院に孝養を尽くせなかった代わりに、母女院や同母姉妹である姫宮（＝一品宮）を大切にしようとした後一条帝による措置である。史実において一品に叙された親王・内親王は少なく、后宮所生でも限られた内親王しか叙されていない。[13] 物語においても、一品内親王はあまりいない。[14] 一品宮はとりわけ尊貴な内親王である。

巻三における一品宮は、父院崩後とはいえ母后は在世中で、同腹の後一条帝は在位中であった。また母方の太政大臣家でも、外祖父に当たる太政大臣は健在で、その男には権大納言や宰相中将がいた。一品宮は、

NII-Electronic Library Service

Meisei University

自身が一品であるのみならず、後見のしっかりした格の高い内親王であったといえよう。嵯峨帝皇女たちと違って、一品宮側には降嫁を望む理由は全くない。母女院としても「もとより、かやうの筋（＝降嫁）には、思ひきこえさせたまはざりしを（巻三・②87）」と一品宮の降嫁を全く考えておらず、さらには

宮も、いと若き人にもおはしまさねば、かかることを聞かせたまひて、いかでか疎かに思し嘆かざらん。糺の神も引きかけて、さださだと明めさせたまはねば、院にも華やかに合せたてまつらせたまはずなどあるをも、ただひとへに、思はずに心憂くのみ見たてまつらせたまふぞわりなきや。（②83）

と一品宮本人にとっても降嫁は思いもよらぬことだったことがわかる。『源氏物語』にみる四例の降嫁（一院女三宮（＝大宮）・朱雀院女三宮（＝女三宮）・朱雀院女二宮（＝落葉宮）・今上帝女二宮）を考えると、大宮が降嫁した経緯は不明だが、藤本勝義氏は左大臣の人柄を重視し、「左大臣（降嫁時の官位は不明）の人物を見込んで、帝側（おそらく一院の見解）が降嫁を考えた」と述べられ、帝側が望んだとされた。[15] 女三宮の降嫁は朱雀院が望み、落葉宮の降嫁は「身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。（若菜下・④217）」と、女三宮の代わりにと柏木が望んだ。今上帝女二宮は、今上帝が降嫁を望んでいる。『夜の寝覚』の女一宮が男君に降嫁した経緯は第二部（＝中間欠巻部分）にあり詳細は不明だが、第三部（現存、巻三～五）に残る叙述から推定すると、女君が老関白と結婚したことで失意にあった男君が「朱雀院の宮の御事も思ひ寄りにし[16]（巻五・455）」と女一宮に近づき、女一宮方でも大皇宮が「『〔女一宮ヲ〕世づいたるさまにて見たてまつらむ』と思ひかけ（巻四・385）」て降嫁を許したらしい。つまり、男性貴族本人か内親王側のどちらか一方あるいは双方が強く望み、それが降嫁へと繋がるのである。しかし、狭衣と一品宮の場合は双方ともに降嫁を望んでいなかった。では、なぜ一品宮の降嫁は決定したのだろうか。

三　無実の噂から降嫁へ

一品宮の狭衣への降嫁は、いささか奇異な経緯で成立した。事実無根の噂が降嫁へと繋がったのである。

嵯峨帝皇女の狭衣への降嫁はさまざまな要因により回避された。しかし最大の原因は、狭衣自身が降嫁を望んでいなかったため、[17] 降嫁の実現を遅らせたことにあるといえよう。降嫁が具体化する前に何らかの障害が生じて話が立ち消えとなるのである。それに対して、一品宮の場合、誤解を招いてから降嫁が決定されるまでわずか数か月しか要していない。[18] 事実無根の噂は急速に広まって、狭衣・一品宮の意思とは関わりないところで決定してしまった。以下に、この降嫁がどのようにして決定したのかを、確認したい。

飛鳥井女君の消息を今姫君の母代から聞いた狭衣は、常磐井尼君のもとを訪れ、女君の死と、遺児（＝飛鳥井姫君）が一品宮（当時はまだ一品に叙されていない）に引き取られたことを知る。狭衣は「御前（＝一品宮）にこそ、うつくしさにも罪許しても思すらめ、候ふ人々は、あなづらはしうこそ思ふらめ、幼きほどこそ、さてもあらめ、物の心知り、大人びなば、あまた候ふめる中納言、宰相の君などのつらにてこそはあらめ（巻三・②60）」と、将来、飛鳥井姫君が女房たちに軽く扱われることを心配するが、その際「御前にこそ、うつくしさにも罪許しても

NII-Electronic Library Service

Meisei University

思すらめ」とあるように、一品宮の姫君への愛情や対応には何の不安も抱いていなかった。一品宮本人をそれほど詳しく知っていたわけではなかろうから、高貴な内親王としてのあるべき心の持ち方を想像したのだろう。狭衣は、一品宮に悪い印象を持っていたわけではない。

狭衣は姫君見たさに一条院周辺を徘徊するようになる。「この御辺りの立ち聞き垣間見など、心に入りたる、もし見つくる人あらば、宮の御ためにあぢきなきことや出で来ん、わづらはしき方もなきにもあらず。（②76）」と、一品宮のことをも心配していた垣間見は、伏線となっている。そして女院が参内している夜、一品宮も不在と思い込んだ狭衣は一条院に忍び入った。

思ふままなるは、我がためも人のためも、あぢきなくもいとほしくも悔しうもあるわざぞかしと、いくらの年の積りならねど、思ひ知られたまふことなれば、わづらはしくて、やをら出でたまふに、（②78）

一条院への侵入は自分のためだけでなく一品宮にとっても不名誉なことになりかねないと自覚する狭衣は早々に退去するが、不運にも帰り際に権大納言に見付けられる。さらに、参内したと思われていた一品宮が、実は院に留まっていたことが明かされる。一品宮に下心を持つ権大納言は「〔狭衣ガ〕いとけざやかに出でておはせしを見てしかば、ことにはばかりもなく（②81）」噂を広め、「聞き継ぐ人のあまたになりつつ、内裏わたり、院の辺などにても、やうやう言ひ出で（同）」と噂は帝・女院にまで達し、「「その夜、その暁に出でたまひし御車、そこそこに立てりしこと。夜深く、その事、御格子、妻戸の開きたりしは、さにこそありけれ」と、折々の立ち聞き、垣間見のほどをも、ほの見ける人々、その折は何とも目留むるもなかりけれど、かかること出で来て後は、忍びつつ各々言ひ合せなどしけり（同）」と、狭衣の徘徊が一品宮と結びつけられることになる。狭衣はのちに「など過ぎにし方の、隠れ蓑を見あらはす人のなかりしこそ、さるは、かの心後れたりし懐紙のついでには、もて騒がれぬべかりけるものを（②133）」と、一品宮との無実の噂がいとも簡単に広まりながら、かつて入道宮のもとに忍び込んだことが全く見とがめられなかったことを悔しく思い返すが、それほどまでに一品宮との噂は事実無根でありながら驚くほどの真実味を付加して広がっていった。

噂を耳にした一品宮の乳母である内侍は、盛りを過ぎた一品宮と狭衣とでは不釣り合いだと感じ、噂を否定する。次に挙げるのは内侍乳母のことばである。

「少将命婦のいつぞや、かく、このころ立ち返りたまひてなど語りしに、あな、苦し、嵯峨院の宮たちをうち代り預けさせたまへど、聞き入れたまはぬに、まいて盛り過ぎさせたまひぬ、あな恥づかし、おぼろけの人見えたまふべくやはとて止みにしを、少将命婦の局になん、時々寄りたまふとぞあなりしを、人の言ひなすならん。すべて候ふ人の住むにつけてなど、かかることは出で来るなめり。またまねびをだになしたまひそ」と、むづかられて止みぬるに、（②80）

一品宮を最もよく知る乳母も、内親王に勝る狭衣の優位性を認めている。『源氏物語』の一条御息所は落葉宮を皇女腹の女三宮に匹敵する内親王と考え、柏木への降嫁を反対した。『源氏物語』では更衣腹の内親王も高貴な存在であり、臣下への降嫁は是とされなかった。しかし『狭衣物語』では后宮所生の一品宮でさえ、狭衣と比べると見劣りするという。狭衣の卓越した資質をあらわす表現ではあるが、現実離れしているとも

NII-Electronic Library Service

Meisei University

いえよう。

狭衣は広まる噂に嘆き、仲介役と目されて蟄居した少将命婦のもとに手紙を届ける。内侍乳母を介して狭衣の手紙を見た女院は

御前に持て参りて、御覧ぜさせて、少将嘆くことども啓すれば、いかなるにても、かく軽々しき御名の流れぬるを、思し乱れて物ものたまはず。

文はさすがにゆかしくや思すらん、取りて御覧ず。

思ひやる我が魂や通ふらん身はよそながら着たる濡れ衣

とある書きざま、手などはしも、げに、内親王たちにおはすとも、いかでかと見えたり。いかなる心にて、かく濡れ衣にしもなしたらんと、なほ涙のみこぼれさせたまふ、さもぞ、いといとほしう見たてまつる。(②84)

と、内親王と並べてもひけをとらない狭衣のすばらしさを認めているが、噂は真偽に関わらないところまで達していた。同様のことは堀川大臣の感慨でも記され、ついに大殿は女院に降嫁を願い出る。

「我が進み申さざらんに、あれより、いかでか、かかりけり、さはとものたまはせん。無きことにても、かばかりの人に名を立てたてまつりて、音なくて止まんは、いといと不便なることなり。承け引きたまはぬまでも、我このこと女院に申さん。さのみ心にまかせてみるべきことならず」と、まれまれむつかりたまひて、参りたまへらば、「ただ預かりまゐらせん」とたびたび申したまふに、さは、されば こそ、自らは人目をつつみたまひて、大臣して、かく申させたまふなりけりと、心得果てさせたまひぬれど、さらばなども、いかでか、ふとのたまはせん、もとより、かやうの筋には、思ひきこえさせたまはざりしを、今はいとど盛りも過ぎたまひにたり、自らの御本意深きさまに、今日明日にてもと思し定めたるを、かかる御名の隠れなくなりぬるも、いみじう思し嘆かる。さりとても、確かならぬことによりて、我さへうちまかせきこえんも、なほつつましく心苦しきを、いかで人のあながちに言ふほどを聞き過して、「思ひ思ひてこそ止みにしか」など、世の例に言ひ流されたまはんさまなどを、さまざまに釣する海人にも劣るまじうしをれ過ぐしたまひけり。(②87)

大殿の決断は一品宮に浮き名を流させてしまったことに対する処置といえるが、女院は降嫁など思いも寄らなかった一品宮にふりかかった噂を嘆いた。つづいて大殿は後一条帝にも降嫁を願い出る。

内にも、大臣ついで作り出でて、奏したまひければ、人の物言ひは真なりけりと思しめして、猪名山ゆすりにては取り所なきを、げにさもなどかはと思しめす。おとなしきほどの衰へも恥づかしとやあらん、限りなき御身といふとも、心ゆかず思はれて、うちまもりたまはんこそ、いといとほしく憂かるべけれ、嵯峨の入道の宮のまたなくめでたう聞きしを、斎院には劣りたまひてあらんかし、ただこの御ありさまに劣らざらんを、我が妻に見定めてこそとて、今までかくてはあるとこそ聞け、あなかたはらいたと思しめされながら、さはたいかではのたまはん。また、前々のことを聞かせたまへば、かの心に少しももの憂からんことをば、さらに進み言はざなる、大臣のかく方々にねんごろに言はるるは、かの自らのけしきに従ふにこそはと推し量られたまふにぞ、頼もしう思しめされける。

女院も、かくなど聞こえ合せたまひて、御宿世やありけん、誰もつつましう思しながら、かくねんごろに言ふ折に、思ひ弱りたるさまにてと思しなりたるを、大殿はうれしう、年ごろの御本意叶ひに

NII-Electronic Library Service

Meisei University

たりと思し喜びたり。（②88）

源氏宮に劣る人との結婚を狭衣が望んでいないという後一条帝の認識は正しい。しかし、常ならば狭衣の意に沿わないことをしない堀川大臣が熱心に降嫁を申し出る背景には、「かの自らのけしきに従ふにこそはと推し量られ」と、狭衣自身の意向があるのではないかと、希望観測的な推量をし、また女院も「誰もつつましう思しながら」と、乗り気のない話ながら、「宿世」として降嫁を受け入れてしまう。[19] そして世間は「かかる御事により、かく、今まであやしかりつる御独り住みなりと、疎きも親しきも思ひ合せ（②93）」と、狭衣の独り住みを一品宮ゆえと好意的に理解した。結果、一品宮の狭衣への降嫁は、狭衣・一品宮の両者が全く望まないにもかかわらず、無実の噂と誤解から急転直下に決定した。

四　狭衣の隔意　―同居しない降嫁―

一品宮の降嫁が話題にされたときから狭衣は消極的で、この結婚が不幸に終わる予感はあった。しかし一品宮に限らず、数回記された嵯峨帝皇女の降嫁の際にも狭衣はまったく乗り気でなかった。とはいえ、もし仮に、降嫁の相手が嵯峨帝女二宮だったならば、結婚後に狭衣もそれなりの満足を得られたかもしれず、つまり、狭衣の降嫁に対する消極性と不幸な結婚生活とは直接には繋がらない。この結婚が不幸な結末を迎えたのは、狭衣が一品宮に対して愛情を感じることがなく、また一品宮も狭衣の態度に敏感であったため、二人は理解し合うことなく終わったからである。その、狭衣の愛情が薄さを端的に示すのが隔意であった。狭衣は終始一品宮に真実を語らなかった。誠意ある態度を示していないのである。そうした狭衣の姿勢が最初に見て取れるのが、飛鳥井姫君に関してである。

かくとや、宮に聞こえてましと思せど、物語もうち解けて、ふとはえ聞こえにくげなる御ありさまなれば、何かは、今さらずとも、かくてあらば、いとよくもてなしてんと思すを、（巻三・②121）

一条院で飛鳥井姫君に会う機会を得た狭衣は、一品宮に真実を告げることも考えるが、夫婦仲の疎遠さを考えて、結局何も語らなかった。しかし、狭衣が口ずさんだ歌が宮の乳母子中将を介して一品宮に伝えられ、宮は、飛鳥井姫君が狭衣の娘であることと、姫君に会うために狭衣が一条院周辺を徘徊していたこと、そしてそれが自分の降嫁に繋がったことを察してしまう。たった一首の歌でほぼすべてを見抜いてしまう宮の聡明さが際立つが、宮が真実を悟ったことを知らない狭衣は、体良い偽りを口にする。

「年の積るままに、かかる人のなきこそさうざうしかんべけれ。心に任せることのやうに、殿などの見せぬことと、常にいさめたまふこそわりなけれ。まことにあるまじき事にやあらん。ここかしこ、例の人のやうならましかば、おのづからうち出づる山賤の垣ほにもあらまし。今は、いかがはせん。姫君をこそ頼みきこゆべかめれ」と、つれなくのたまふを、あながちに隠すべきことかは、さるまじきことをさへも、隔つる心のほどかな、まいていかになど、思しやる心の中、恥づかしう心憂し。いつまで、かばかりかりそめにのみ思されて、いかさまにして、なほ思ひ立ちしさまにもなりにしがなと思しけり。（②124）

自分には子がいないから、一品宮の養女である飛鳥井姫君を我が子のように思いたいと堂々と嘘をつく狭衣のことばは、すでに姫君の素姓を悟

NII-Electronic Library Service

Meisei University

っている一品宮にとって、隔意以外の何ものでもない。宮は真実を悟っていることを和歌でさりげなく告げるが、狭衣はそれでも真実を語らなかった。以前にも増して一品宮を煩わしく思った狭衣は宮を避け、夫婦仲はさらに疎遠になった。

悪循環を繰り返していた狭衣と一品宮の隔絶を決定的なものにしたのが、巻三末から四にかけて記された狭衣の出家騒動である。

一品の宮に参りたまはぬことをば、誰も、いみじう聞こえたまひしかど、この後は、さやうのことを、苦しう思しけるにやとて、かけても聞こえ出でたまはず。昼間のほども、立ち出でたまふをば、いと後ろめたげに思ひきこえさせたまへれど、さのみ籠りゐたまへらんも、音聞き苦しかるべければ、一品の宮ばかりには参りたまひて、紛らはしき歩きもえしたまはざりけり。されど、何事も世の中の事隠れなくて、おのづから聞く人々もありて、まことしう剃りやつしたまへらんやうに、惜しみ悲しがりきこゆれば、宮も聞かせたまひて、いとど心憂く思しめすこと限りなし。（巻四・②216）

出家は賀茂明神の夢告によって阻止されたが、自分という妻がいながら出家を望んだ狭衣への絶望と、出家騒動すら人伝の噂でしか耳にしなかったことへの諦めが読みとれる。一品宮との結婚が出家を望む一因になったと想像した堀川大臣は、以後、狭衣が一品宮のもとへ行かないことにも寛容になった。その後、狭衣は源氏宮の形代というべき宮の姫君と結婚する。宮の姫君の母式部卿宮の上が没したとき、狭衣は式部卿宮の上本人への興味もあって深く悲しむが、続いて記される一品宮の母女院の死に関しては、何の感慨も持たない。むしろ、女院の死により宮の姫君の引き取りが遅れることを案ずるだけである。母院の死に衝撃を受けているであろう一品宮は物語には登場しない。もちろん、狭衣が失意の一品宮のもとを訪れることも、宮の姫君との結婚を告げることもない。

一品の宮わたりに聞かせたまはんに、この頃は、折さへいとほしく（＝女院の喪中）など、思しめすにや、誰にも暫しなどこそ、のたまはせつれ」など、君の御心の浮かれ惑ひたまひて、つゆばかり心とどめたまふ人もなう、もて騒がれたまへる、年頃の物語、細やかに、語り出でて喜ぶ。（②313）

一品宮に宮の姫君の引き取りを告げないことについて、狭衣は女院の喪中であることを理由にしてはいるが、喪中でなくても告げることはしなかったのではなかろうか。たとえば、『源氏物語』では、薫は浮舟引き取りについて女二宮に同意を求めた。女二宮本人よりも、背後に存在する今上帝の思惑を推し量ってのことと思われるが、それでも薫自らが浮舟のことを告げている。また『夜の寝覚』において、男君は、女君との「もとよりありしさまをくはしく（巻五・479）」「さまざま（同）」「こまやかに（480）」女一宮に語っている。本質的には『源氏物語』の薫と『夜の寝覚』の男君との態度は異なるが、降嫁した内親王に対してそれなりに誠意ある態度をみせようとしていることがうかがえる。[20] しかし狭衣が一品宮に心中を語ることはない。

姫宮も、年頃は、あさましう、見ま憂き心と思しながら、さすがに、そのことと取り立てて、なめげに見えきこゆることもなきをば、ただ、心の癖にこそはと、身こそつらけれなど、思し知りて、人のつらさは咎むまじきに思しめしつるを、いとかう、また知らず、〔狭衣ト宮の姫君ノ〕めでたき御なからひの例に、言ひ伝へらるる片つかたさへ、いで来にたれば、いとど言ふ方なうのみ思されて、やがて、この御はて（＝女院の一周忌）のほどに、尼になりて、見えずなりなばやと、人知れず思せど、それにつけても、人をも身を

NII-Electronic Library Service

Meisei University

も思ひ恨み侘びて、身を捨てつる例に、今・行く末も言ひ流されんさまの、人笑はれに心憂かるべきを、またさりとて、〔狭衣ガ自分ニ〕遂に絶え果てんありさまを、変らぬさまにて見果てんも、今少しをこがましう、我が心の中も、今少し慰め所なかるべしなど思しなりて、薄墨染をば、やがて裁ち替ふまじう設けさせたまひて、渡りたまへる折々も、すべり隠れつつ、更に見えたてまつりたまはぬなりけり。(②323)

一品宮は噂によって、狭衣が宮の姫君と結婚したことと二人の仲睦まじさを知る。狭衣は一品宮に飛鳥井姫君のことも、出家のことも、宮の姫君のことも告げなかった。狭衣は隔意を持ち続けたのである。人伝で狭衣の動静を知る一品宮との間に、信頼関係が築けるはずもない。狭衣が外聞もつくろわず宮の姫君へ愛情を傾けているのを聞くにつけ、「「いとどあさまし」とのみ、御心に余る折は、二三日なども起きも上がらせたまはず、泣き沈みたまへり。(②325)」と一品宮はひどく嘆くが、その嘆き悲しむ様が狭衣に伝えられることはなかった。

さらに一品宮への愛情の薄さをあらわしていると思われるのが、夫婦の別居である。久下裕利氏が、狭衣と一品宮の疎遠な夫婦仲について「薫は女二宮を自邸三条宮にむかえたが、狭衣は通い婚の形態をとり、父堀川邸内に構える小寝殿にむかえていない」と述べられたように[21]、物語においては、降嫁した内親王は夫となった男性と同居することが多い。『うつほ物語』『源氏物語』『夜の寝覚』にみる降嫁では、最終的には内親王と同居している[22]。しかし狭衣は一品宮を引き取っておらず、かといって一条院で同居しているわけでもない。狭衣は結婚の当日、気分の悪さを母宮に訴え、その際、宮の住む一条院を「旅所(巻三・②103)」と呼んだ。一条院で一品宮と同居するつもりはなかったことが知られる。その後、巻四になっても一品宮のもとへは「通ひまゐり」(②318、②323)という語が使われている。一品宮の住む一条院は狭衣の常の住まいではなかった。狭衣にとって一品宮はあくまでも生活圏を共有しない妻だったのである。

五 「見ま憂」き世の中

狭衣と一品宮は心を通わせることがなかった。不幸な結婚といえるが、この結婚に関して特徴的に使われることばが「見ま憂」である。『狭衣物語』には「見ま憂」(見えま憂)の用例が七例あり、その全てが狭衣と一品宮の、この結婚に関する想いとして使われている。以下にその用例を挙げて、検証したい。

①最初に「見ま憂」が使われるのは、堀川大臣の要請により一品宮の降嫁が許された直後、狭衣が深く嘆いたときである。

大将殿は思し嘆くさまいみじ。嵯峨院の、昔より、殿の御心ざしにも劣らず、あはれにかたじけなかりしをだに、こなたざまには見知らぬやうにて止みにしものを、げに、その折は、思ふ心一つよりぞかし、今は、さりとても、心より外に長らへん限り、いとかかる独り住みにてもえあり果てぬやうもありなん、されど、心より外に、なげのあはれをだにかけん人のあらん折や、その心も違はん、来ん世の海人となりても、かづきては止むまじき御ありさまに、少しも通はざらん人をば、夢にも見ま憂ければ、さばかりはかなき世におのづから過ぎなまほし、かくあるまじかりけることと、(巻三・②89)

NII-Electronic Library Service

Meisei University

狭衣は源氏宮や入道宮に劣るような女性との結婚は見るのも嫌だと思っている。一品宮は既に乳母・女院・帝によって「盛り過ぎ」「衰へ」と評されており、狭衣がこの結婚に満足することはないであろうことは充分に予想できる。一品宮と同腹の後一条帝は、尊貴な身分であっても「衰へ」た一品宮が狭衣に「心ゆかず思はれ（②８８）」たなら、宮のために気の毒だと思っていたが、その危惧は狭衣の思惟によっても確認されている。

②結婚前から狭衣によって「見ま憂」と評された降嫁の実際は、当然予想されるように幸せなものではなかった。狭衣だけではなく、一品宮も次のような感慨を持つ。

女宮、限りなくあてなる御心といへども、前の世より産霊の神のし置きたまへる契りなればにや、軽々しき御名を流したまへる始めより、見ま憂くつらき人（＝狭衣）と思しむすほほるるままに、御仲の疎くのみなりまさりたまへど（②１１４）

夫婦仲が疎くなったのは、噂が立ったときから狭衣を見るのも嫌だと感じて宮が心を閉ざしていたからだという。降嫁前に一品宮の心中が語られることはなかったが、狭衣だけでなく一品宮も結婚前から、降嫁を「憂」きもの感じていたことが明らかになる。

③その後、狭衣の不用意な詠歌によって、一品宮は飛鳥井姫君が狭衣の娘であることと、降嫁に至った真相を悟る。

さはこの児（＝飛鳥井姫君）は、なにがしの少将のと聞きしは、あらざりけるにこそ、これによりて、このわたりにはあながちに尋ね寄りにけるにこそ、いみじう物思ひたるさまなるも、このことにこそと心得たまへば、いとあなづらはしく思しつる人（＝飛鳥井女君）のゆかりなれど、ただうつくしかりつるによりて、さうざうしきに、をかしきさまに生し出でて持たらんと、思しかしづきつるに、かばかり見えま憂くつらき人（＝狭衣）を思し出つるには、これ（＝姫君）がゆかりばかりに、心は空ながら見え過すよと、いとものしう思しなりにけり。（②１２３）

飛鳥井姫君に会いたいが為に狭衣が一条院周辺を徘徊していたこと、そしてそれが無実の噂を呼び、降嫁に繋がったことに思い至った一品宮は、「これがゆかり」と、姫君のせいで狭衣との辛い結婚が成立したことを不快に思う。自らの衰えを気にして、狭衣の前に出ることを避けていた一品宮は、降嫁の真相を悟り、これ以降、今までにも増して狭衣と顔を合わせることをしなくなった。

④一品宮は真実を悟っていることを和歌で告げるが、狭衣は打ち明けることをせず口を閉ざす。狭衣の態度は次のように一品宮に受け取られる。

〔狭衣ガ会話ヲ〕止みたまひぬるけしきの、残り多かるは、恥づかしげにて、見ま憂く思さるれば、（中略）これ（＝飛鳥井姫君）がゆかりにて、あながちに念じ過ぐすらんも、人わらうおぼゆるを（②１２６）

隠し事が多そうな狭衣を見るのも嫌だと思う一品宮と狭衣との対話はますます減り、宮のことばは狭衣を前にしても「独り言（②１２８）」になっていく。同じ空間にいても、二人の間に会話は成立しない。お互いに見るのも嫌だと思っていた結婚は、さらに狭衣の隔意によって修復の可能性を失ったといえる。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

⑤巻三の巻末近く、狭衣は入道宮に迫る。入道宮は聞き入れず、狭衣は往時を後悔するが、その際「同じさまにてだに聞かれたてまつらじと思ひしものを、思はずに見ま憂き世の中（＝一品宮との仲）を、寝る夜はなしに嘆き明かすとは、知りたまはぬぞ（②182）」と、俗世にいることを入道宮に聞かれるのも辛いのに、不本意な夫婦仲を入道宮は知らないのだと、一品宮との仲を回想する。狭衣は出家を決意するが、一品宮は出家の絆にならないばかりではなく、むしろ狭衣を出家へと向かわせる存在なのである。

⑥狭衣の出家は賀茂明神の夢告により阻止される。一品宮との結婚が狭衣の出家の一因と感じた堀川大臣は、以後、宮とのことを狭衣に忠告することをしなくなった。その後、狭衣は宮の姫君と結婚し、その仲睦まじさは世間でも噂されるようになる。

姫宮（＝一品宮）も、年頃は、あさましう、見ま憂き心と思しながら、さすがに、そのことと取り立てて、なめげに見えきこゆることもなきをば、ただ、心の癖にこそはと、身こそつらけれなど、思し知りて、人のつらさは咎むまじきに思しめしつる（巻四・②323）

一品宮は狭衣のことを年来「見ま憂き心」と思っていた。しかし一方では、狭衣の冷淡さを狭衣の「心の癖」と理解し、「人のつらさは咎むまじ」と狭衣を恨むまいとしていた。決して良いとはいえない夫婦仲は、結婚そのものに消極的な狭衣の資質によるものだと、無理にでも思い込み、納得しようとしていた一品宮にとって、狭衣が宮の姫君と結婚したことやその仲睦まじさを人伝に聞くことは、耐え難いものだったに違いない。一品宮の絶望と、狭衣への不信は決定的になったといえよう。

⑦伊勢神宮の神託により狭衣は即位する。狭衣の父堀川院は、譲位した後一条院の厚意に応えるためにも院と同腹の一品宮を疎かに扱うことはすべきではないと助言するが、宮はこれ以上の物笑いになることを避け、狭衣帝の後宮には入らない。

帝（＝狭衣）は、例の、御けしきの煩はしげなるを、いかにとは思しながら、「さま変りたるありさまを、いかが見たまはん」と、恥づかしき方にも、心ゆるびなく思ひきこえさせたまへば、心殊に引きつくろひて待ちきこえさせたまふに、「御心地例ならで、留らせたまひにけるかはりに、姫君（＝飛鳥井姫君）なん、一所まゐらせたまへりける」と奏するを聞かせたまふも、いとあやしう本意なき心地せさせたまへど、いでや、いと思はずに、あまりかどかどしき御心ばへは、見ま憂くのみ、おぼえさせたまひけり。（②352）

一品宮は狭衣との夫婦仲を「憂き世の中（②352）」と思い、飛鳥井姫君だけを参内させた。それを知った狭衣は、その「かどかどしき御心ばへ」を「見ま憂」く思っている。狭衣・一品宮両者にとって、この結婚は終始「憂」きものでしかなかった。結局、一品宮は後宮に入ることなく出家し没した。

以上七例をみると、いずれも狭衣が一品宮を、あるいは一品宮が狭衣を「見ま憂」く感じている。この他にも、一品宮は狭衣との仲を「心憂（②324）」・「世を背きなん後まで、名残もとどめま憂きを（②332）」と「憂」ということばを何度も使用している。狭衣と一品宮は噂が立った当初から一貫してお互いの存在を肯定的に受けとめることをしなかった。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

六　一品宮の社会的地位

宮の姫君の兄（＝宰相中将）は「一品の宮おはするにても、うちうちの御心ざしなどを見はべるに、などかはとこそ、見はべれ（巻四・②263）」と、狭衣と一品宮の不仲を感じていたらしいから、狭衣にごく近しい人物たちには、夫婦の不仲は知られていたのだろう。しかし、対外的にみた場合、一品宮は狭衣の正妻として存在し、狭衣もそのように待遇していたらしい。出家騒動後の狭衣は、堀川大臣の監視が厳しく、容易く出歩くこともままならないほどであったが、「さのみ籠りゐたまへらんも、音聞き苦しかるべければ、一品の宮ばかりには参りたまひて、紛らはしき歩きもえしたまはざりけり。（②216）」と、唯一、一品宮の所には通っていた。また宮の姫君との結婚後も「稀々も、一品の宮ばかりにうち通ひまゐりたまふ（②318）」・「もとより、通ひ参りたまひし夜数は、かうて後とても変ることなう、目安くもてなしたまへる（②323）」という状態であった。つまりは、内親王としての体裁を保てる程度の待遇はされていた。さらに、即位した狭衣のもとに参内しない一品宮に対しては「〔狭衣カラノ〕御使も絶えず参りつつ（②357）」というのだから、狭衣も一品宮の存在を全く無視していたわけではない。二人の実情は心の通わない「見ま憂」きものだったが、狭衣は宮に対して必要最低限の礼は尽くしていたといえる。「〔狭衣帝ノ〕かやうなる御けしきを、一品の宮方に心寄せたてまつる上人などは、つきづきしう見なしたてまつりつつ、あはれげに語りきこえさす（②357）」と一品宮に好意的な殿上人もおり、それらの人々は狭衣の物憂げなさまと一品宮の不参とを結びつけて解釈していた。元斎院であり、後見のしっかりした一品宮の社会的立場は決して低いものではない。「年頃、いかさまにして、たまさかにも、かよはし見たてまつるわざもがなと思ひ願ひたまへる上達部・親王たちなど、かう、おほやけざまにならせたまひては、なかなか否びさせたまはぬやうもありなん。煩はしかりつる一品の宮さへ、かう世を背き給ひぬべかなるは、吾子の御宿世のめでたかるべきなり（②360）」と、上達部・親王たちは、「煩はし」い存在であった一品宮の出家を心中では喜び、娘たちの入内を志した。一品宮は狭衣の正妻として認知されていたのである。狭衣は一品宮に愛情を感じていなかったが、社会的には格式高い正妻として認知される待遇がなされており、一品宮の対外的評価は決して低いものではなかった。

おわりに

物語の終わり近く、一品宮がいつの頃からか病がちであったことが記される。気高くうち解けない妻が、病中に見せるか弱さに夫が愛情を感じることは、『源氏物語』の葵上と源氏、あるいは『夜の寝覚』の女一宮と男君の例があるが、一品宮が病がちになるのは狭衣が即位した後であり、結局、狭衣は病中の一品宮に会うことはなかった。これも一品宮と狭衣がうち解けることなく終わる一因と見て良いだろう。一品宮は出家し、程なく没した。その後、藤壺女御（＝宮の姫君）が立后する。宮の姫君は式部卿宮女ではあるが、社会的立場も後見の強さも一品宮とはくらべようもない。仮に、一品宮が存命中であったならば、藤壺女御の立后はあり得なかったであろう。[23]

一品宮没後、狭衣は「かう長からざりける御命のほどにては、かやうに思ひ出でたてまつる人なくて過ぎたまひなまし、いかにめでたからま

NII-Electronic Library Service

Meisei University

し（巻四・②391）」と、一品宮の不幸な結婚をまるで他人事のように回想する。皇女独身論に基づく考え方だが、狭衣は「故宮（＝故一品宮）の御ありさまなどを思し合するにも、いでや、なほ、宮達は、ただ心にくくてやみたまひなんこそ、目安かりぬべけれ（同）」と、降嫁した皇女の不幸な例として一品宮を想起し、今は一品となった自分の娘飛鳥井姫君を東宮に入れるつもりはない。

一品宮は后宮所生で、後一条帝と同腹という尊貴な内親王であった。内親王を室に持つことは男性貴族の社会的立場の高さを示す。物語作者にも享受者にもそうした認識はあったろう。しかし、狭衣と一品宮は無実の噂が立ったときから終始一貫して降嫁を肯定的に受けとめなかった。狭衣の隔意によって一品宮は頑なな態度を取り、両者は心を通わすことのないままであった。対外的には格式高い内親王として遇されていたが、夫婦の内実は「見ま憂」きものであった。内親王降嫁を描く物語は多いが、『狭衣物語』の一品宮の降嫁は、『うつほ物語』や『源氏物語』あるいは『夜の寝覚』にみられる内親王降嫁と比べても特異といえよう。

注

（1）狭衣への降嫁が話題にされたのは、嵯峨帝女二宮・嵯峨帝女三宮・嵯峨院女一宮・一品宮の順。ただし、嵯峨院女一宮の降嫁は具体的な話にまで発展せず、その間に一品宮が狭衣に降嫁し、その後、嵯峨院女一宮は後一条帝の後宮に入内した。

（2）『狭衣物語』の本文は、小町谷照彦・後藤祥子氏校注・訳　新編日本古典文学全集『狭衣物語』小学館　一九九九・一一、二〇〇一・一一　による。丸数字は新編全集の巻数。数字はページ。私に注を付した。また、波線は筆者。以下同。

（3）今井源衛氏「女三宮の降嫁」（『改訂版　源氏物語の研究』未来社　一九六二・七）

（4）後藤祥子氏「皇女の結婚―落葉宮の場合」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会　一九八六・二）

（5）『小右記』の本文は『大日本古記録』（岩波書店　一九八七・一）による。

（6）平安朝において、父帝在位中の降嫁と思われるのは、嵯峨源氏潔姫（配偶者は藤原良房）の一例。また父院在世中の降嫁も宇多源氏順子（配偶者は藤原忠平）のみ。いずれも賜姓源氏であって内親王ではない。内親王の降嫁は、全て父帝（あるいは父院）崩後のこと。

（7）『源氏物語』の本文は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男氏校注・訳　新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館　一九九四・三～一九九八・四）による。丸数字は新編全集の巻数、算用数字はページ。

（8）例えば『源氏物語』の朱雀院女三宮（配偶者は源氏）は父院在世中、今上帝女二宮（配偶者は薫）は父帝在位中の降嫁だが、いずれも后宮所生ではない。ただし、『うつほ物語』の大宮（配偶者は源正頼）は、后宮所生の内親王で、父帝の在位中の降嫁であった。

（9）『源氏物語』の兵部卿宮（紫の上の父宮）と藤壺中宮のように、同腹の兄弟姉妹では、兄弟（男性）が姉妹（女性）の後見・庇護にあたることはあっただろう。また、『源氏物語』若菜下で今上帝が父朱雀院の要請を受けて異母姉妹である女三宮を二品に叙したように、異腹であっても、事情によっては皇女の後盾・庇護に協力することもあったと思われる。

（10）大宮の出自は巻二冒頭近くに記されるが、本文は諸本により異同がある。以下、注釈の底本になっているものだけを挙げる。日本古典文学大系（底本内閣文庫本）では「故御息所（＝源氏宮の母である中納言御息所）の御はら（P122）」とあり、これによれば大宮と源氏宮は同母姉妹となる。大宮と源氏宮が同母姉妹の場合、大宮は先帝と中納言御息所の間の皇女ということになるが、内親王宣下を受けているかは不明。ただし、大宮と源氏宮の年齢差が三十歳近くあることを考えれば、いささか無理があろう。新潮日本古典集成（底本春夏秋冬四冊本）では「故御息所の御はらから（上・131）」とあり、大宮と源氏宮の母が姉妹となる。源氏宮の母である中納言御息所は、その名前から中納言の女と推定されるから、大宮も中納言女となる。源氏宮とは伯叔母と姪の関係となる。新編日本古典文学全集（底本深川本）「故御息所の御つづき（①161）」とあり、大宮と源氏宮とは縁者となる。縁者では曖昧だが、新編全集付録の系図では、大宮と中納言御息所を姉妹としている。つまり、大宮は中納言御息所所生の皇女（＝源氏宮とは同母姉妹）か、中納言御息所の姉妹（＝源氏宮とは伯叔母姪）か、ということになるが、大宮と源氏宮とは年齢が三十歳ほど離れており、同母姉妹と考えるよりは、伯叔母と姪と考えた方が無難であろう。

（11）平安朝において、淳和朝以降院政期までは納言の娘が（帝の母ということではなく）立后した例は、三条天皇の皇后である大納言済時女娍子以外にない。なお、娍子が立后するにあたり、亡父は贈大臣となっている。

（12）大宮は中宮（＝東宮の母）に対して「うちとけ睦びきこえたまはんもつつましく

NII-Electronic Library Service

Meisei University

（巻二・①161）」と距離を置いていたと記されており、大宮所生の嵯峨院皇女と中宮所生の東宮とは、異腹の兄弟姉妹に当たるが、親しい交流はなかったものと推察される。

(13) 安田政彦氏「一品親王」（『平安時代皇親の研究』吉川弘文館　一九九八・七）

(14) 『狭衣物語』までの物語において一品に叙された内親王は、『源氏物語』の今上帝女一宮（母は明石中宮）、『夜の寝覚』の女一宮（ただし、一品に叙されたのは、末尾欠巻部分で、詳細は不明）、『狭衣物語』の一条院女一宮（＝一品宮）、飛鳥井姫君（叙されたのは狭衣帝即位後。狭衣と飛鳥井女君の女で、一品宮の養女）である。

(15) 藤本勝義氏「大宮の准拠と造型」（『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院　一九九四・四）

(16) 『夜の寝覚』の本文は、鈴木一雄氏校注・訳　新編日本古典文学全集『夜の寝覚』（小学館　一九九六・九）による。

(17) 最初に女二宮の降嫁が話題にされたとき、「心ときめきしておぼゆることなれど（巻一・①51）」と光栄に思ったらしい表現もみられるが、すぐ後には源氏宮以外との結婚を望まないことが書かれている。

(18) 狭衣が一条院に忍び込んだ時期は具体的には記されないが、今姫君の入内（予定では二月）が立ち消えとなった後に描かれている。噂が広まり降嫁が許されたのは「六月十日（巻三・②91）」以前で、結婚は「八月十日のほど（②92）」となった。狭衣が一条院に忍び込んでから、降嫁が許されるまで四か月、結婚までが半年ほどとなる。

(19) 一品宮降嫁の経緯については、堀口悟氏によるご考察がある（堀口悟氏「一品宮物語の情況設定―『狭衣物語』巻三、狭衣と一品宮とが結婚に至るまでの経過を中心に―」『茨城キリスト教短期大学研究紀要』二四　一九八四・一二）。

(20) 薫は降嫁に積極的ではなかったが、女二宮本人に接した後は「宿世のほど口惜しからざりけりと、心おごりせらるる（宿木・⑤486）」と満足している。

(21) 久下裕利氏「一品宮について―物語と史実と―」（『学苑』七九二　二〇〇六・一〇）

(22) 『うつほ物語』では、左大臣源正頼は嵯峨院女一宮（＝大宮）の母后の宮が用意した三条大宮の邸で同居している。藤原兼雅は俊陰女と同居しているが、のち、嵯峨院女三宮は、兼雅の三条殿に引き取られた。藤原仲忠は女一宮と同居している。『源氏物語』では、左大臣は大宮を自邸に引き取り、源氏も女三宮を六条院に引き取った。柏木は病の際に父大臣邸に引き取られたことからも落葉宮の邸で同居したことが判る。薫は女二宮を三条宮に引き取っている。『夜の寝覚』の男君は、女一宮を自邸に引き取り同居している。

(23) 一品宮存命中であったならば、藤壺女御だけが立后することはなかっただろうが、道長政権以降の史実をかんがみれば、一品宮立后後に、皇子を出産した藤壺女御も立后し、一品宮が皇后、藤壺女御が中宮という、二后並立での藤壺立后は、あり得たかも知れない。

NII-Electronic Library Service